

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経営学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十一月より現職。

後藤新平の中の自治

後藤新平の語りに「自治二訣」がある。「人のおせわにならぬやう人の御世話をやうそしてむくいをもとめぬやう」である。後藤は、晩年、少年団日本連盟(ボーイスカウト)総長として子供達によく話しかけていたという。少年団の代表が築地海軍大学付属地に集まり、天皇の御親鸞を賜った時に群衆に向けて発したフレーズらしい。後藤にとって自治は「生物学の原理」とならんで骨身の信条であった。

後藤は児玉源太郎を総督として仰ぐと台湾総督府民政長官として、八年余にわたり台湾統治の原型をつくりた。その経緯は内務省衛生局長時代に執筆した「台湾統治救急案」の中に鮮やかに記された。

「台湾行政中最モ改良ヲ要スル重ナルモノ如何ヲ問フ」、「スルガ如キハ、蓋シ其急務中ノ最急務ナルモノナラン」と述べた。台湾は清國にとつて「化外の地」であり、放任のまま。だがそれがゆえに「自治ノ制ハ驚クベキ發達ヲ為セリ」というのが後藤の見立てである。警察、裁判、兵制、徵税、その他「トシ

テ備ワザルモノナシ」、自治制こそ「台灣島ニ於ケル一種ノ民法と云ウモ不可ナシ」といふ。

旧慣をただすのではなく、逆に旧慣がうまく機能するよう促すべし、総督府はそのための行政監察に徹すべきだというのが後藤の信条であった。後藤のこの信条が児玉源太郎総督を動かし、そうして台湾の統治が開始されたのである。

権力をもつ者がその権力を存分に用いていいはずがない。権力の放縱な行使は必ずやグラスルーツの反撥を招いて、事態は思わぬ方向へと転じてしまふ。後藤はそう考えていたのであろう。朝敵仙台藩の水沢で出生、自身の実力で地位を築いていくより他ない後藤が、内務省衛生局長を経て台湾総督府民政長官にいたるまでの苦心慘憺の過程で身につけた信条だったのであろう。

首都直下型地震の確率が今後三十年間で七〇パーセントだという。この「東京砂漠」で大地震が発生した場合、国や自治体の救援などすぐには機能しないであろう。自治の観念をここで蘇らせねばと思う。